

## 2025/11/23 「何か食べて」使徒27:33-38

交読文・ヨハネ4：34-38 さ422 セ292 (273)

今年も収穫感謝・謝恩日礼拝を迎えました。境内は、カリンや柿、ザクロや栗、ゆずも大豊作。私たちに与えられている大いなる恵みに感謝しましょう。

ローマへの旅・元気を出しなさい！

今朝はC S教案誌『成長』の箇所ですが、ちょうど始めたばかりの使徒言行録の、最後の場面です。この書は、28章で終わりではなく、今を生きる私たちに続いています。まさにこの日に神様が示してくださったメッセージだと思います。

パウロは三度の伝道旅行を終えて、最後のローマに向けて出航します。しかし、そこに待ち受けていたのは、暴風と漂流、難破という危機的状況の連続でした。パウロは百人隊長に、出航を遅らせるよう警告するのですが、彼は、船長や船主を信用しました。急がば回れ、という諺の逆のことをして、目先のことに追われ、より大きな災難に見舞われてしまったのです。

その窮地に追い込まれた時に、真のリーダーシップを発揮したのが、囚人という身分でありながら、主の器として立てられたパウロでした。元気を出しなさい！とパウロは叫びます。そして、生き残る道は、手放す道である、という真理を語ります。続けて「船は失うが、誰一人として命を失うものはいない」と語っているからです。その言葉通り、船は座礁して大破したにもかかわらず、276人全員が救われる、奇跡が起きました。絶体絶命のとき、私たちは、握り締めている拳を、神様の前に開きましょう。開かれた心に、主の霊が注がれ、私たちは救われます。

パウロは「自業自得だ！」と怒る代わりに、「元気を出しなさい！」と叫びました。復活のイエス様が「平和があるように！」と弟子たちにかけて声に重なります。

希望をいただく

パウロが「何か食べてください」と励ましたのは、きっと誰も何も食べていなかったからでしょう。食べられなかったのでしょうか。どんなに目の前に食べ物が並んでいても、ちっとも欲しくない時があります。失望している時です。そんな人に、食べさせるということが、どんなに難しいことか、体験した人なら知っているでしょう。食事という、本能的なことでさえ、無理やり押し付けることはできません。

しかし、パウロの言葉には、元気づいてみんなが食事をしたと聖書に書いてあります。生き延びたい、という気持ちになったからです。その証拠に、お腹いっぱい食べた後、残った食料は船を軽くするために、捨ててしまいました。

収穫感謝祭は、ピルグリム・ファーザーズと、アメリカ・インディアンの心温まる出来事を記念しています。大西洋を渡ったピューリタンたちでしたが、その年の冬には半数が死亡しました。翌年の収穫の食卓に、どれほどの溢れる想いを感じたことでしょうか。生きていこう、その希望は、懐かしい、けれども、新しい励ましだったに違いありません。

私たちには、希望があります。目先の希望でもなければ、握り締めている希望でもありません。思いもよらない「元気を出してね」という励ましの言葉と、復活したイエス様の「平和があるように」という言葉がもたらす希望です。今日は、何を食べましょうか。